

問 次の文章を読み、筆者が現代の「おまつり」をどう捉えているかを踏まえた上で、あなた自身が考える現代の「おまつり」について六〇〇字以上八〇〇字以内で述べなさい。その際、従来の民俗学における「祭り」についても、対比しながら述べなさい。

（教学社注・解答用紙には題目を書く欄が設けられている。）

かつて柳田国男は「何がマツリであり又何がマツリでないかということとは、一生に数百千回、この言葉を使う人は皆知って居る」と述べていた。ところが現在、この「祭り」という言葉の共訳可能性は大きく揺らいでいるように思われる。たとえば、多くの民俗学者は、インターネットなどで、顔も合わせたことのない不特定多数の者たちが、社会的な事件にかこつたり、たわいもない瑣末な諍いなどに

に乗じて盛り上がることを「祭り」と称していると知ったなら、大いに眉を顰めることだろう。この盛り上がりは、通常はネット上の掲示板やブログなど、双方向的な共有の場への書き込みという形で表出するが、時にはある程度組織的な現実の行動に繋がる場合もある。あるいは、ごく趣味的な限られた仲間同士が集まって特定の話題で盛り上がることを「祭り」と称するなど、現代の一〇代の若者たちにはほとんど違和感のないものだろう。筆者は先日、若い友人が、自宅に友人を招いて開くホームパーティー（いわゆる学生の「飲み会」）を「祭り」と呼んでいるのを耳にしてさすがに驚いた。

あるいは現代の若者なら、「フェスティバル」と聞いて最初に頭に浮かぶのは、夏に各地で開かれる野外ロックフェスティバルになるかもしれない。特定の期間、日常の生活から隔絶された場所で（苗場スキー場や石狩湾ふ頭、朝霧高原などが「聖地」とされる）、同じものを愛好する多数の人間が、エネルギーを発散することを目的に集まってくる。多くの者はこの日のために一年かけて小遣いやアルバイト代を貯め、ほとんどの機会にしか使わない装備（テントや雨合羽）を携え、この日のためにとっておきの服装で出かけていく。なるほど祭りのである。

従来の民俗学において、祭りはハレの時間・空間において行われるもの、ハレの時間・空間を現出させるものと考えられてきた。ハレとは、日常（ケ）と対立する非日常という性質を指し示す民俗概念として便利に使われており、祭りには非日常の時間・空間の設定が必要であるという考え方自体は、今も有効性を失ってはいない。しかし、その非日常の時間・空間の設定を、カミを招き、饗応し、服従を表現するという、祭りの内容と考えられてきたものの面から見た場合、今あげたような、日々人の口に上り突発的に発生する「祭り」は民俗学の視野から外れていく。

だがもう一度柳田の言葉に立ち返ってみよう。我々は何が祭りで何が祭りでないかを知っている。それを信じるならば、彼らがそうしたイベントを「祭り」とあえて呼ぶのは何故かと問い直すことがあっても良いだろう。そこにはやはり、何らかの非日常の感覚が存在すると言えるのではないか。

（俵木悟「華麗なる祭り」古家信平・俵木悟・菊地健策・松尾恒一『日本の民俗―祭りの快楽』九、吉川弘文館、二〇〇九年）※問題文の一部を改訂した。